

漱石と寅彦の「胃痛」表現

四宮義正

夏目漱石は大正5年12月9日に胃潰瘍で亡くなっている。この頃、寅彦も同病で寝込んでいたが無理を押して見舞に行った。しかし、もはや面会は叶わなかった。12日に青山斎場で葬儀が執り行われたが自身は参列できず妻の寛子が代理で列席している。年末の日記に歳晩所感として「夏目先生を失うた事は自分の生涯に取って大きな出来事である。」と書いている。

漱石と寅彦はいずれも長く胃病に悩まされた。つまりこの意味でも師弟であった。日記や書簡をみると、二人とも一流の文学者だけありユニークな表現が散見される。周辺の人々の証言と合わせて見てみたい。

漱石は明治42年9月から10月にかけて友人の中村是公に招待されて満韓旅行に出かけている。胃痛のため出発を延期して無理に旅したが、やはり各地で苦勞している。

何だか自分の胃が朝から自分を裏切ろうと工^{たく}んでいる様な不安がある。(略)

飯^{めし}の菜^{さい}に奴^{やつこ}豆腐を一丁食ったところが、その豆腐が腹へ這入るや否^{はい}や急に石灰の塊^{いしばい}に変化して、胃の中を塞^{ふさ}いでいるような心持である。(「満韓ところどころ」、明治42年)

その後、明治43年6月18日、長与胃腸病院へ入院している。この時、寅彦は留学中であつた。当時の治療法は現在では考えられない方法である。入院中の日記を引用する。

○杉本氏回診。療治後血がとまってから2週間して腹を蒸すのが、胃潰瘍の療法なりという。其のあとは火ぶくれの様に色が変わるんだという。腹だから差支えなからうと答える。

○今日より^{こんにやく}蒟蒻で腹をやく。痛い事^{おびただ}夥し。

○腹に火ぶくれが二ヶ所出来る。

○腹の火ぶくれを見て杉本さんが、こう精を出してやったら^{きつと}屹度よくなるだろうと賞めた。病院だから火ぶくれを^{こしら}拵えて賞められるのだろう。

○蒟蒻今日は六日目也。あついののは稍我慢しやすくなる。ただ皮膚がすれて紫色になり、火ぶくれのあとは癩の如く水を含んではれ上る。

○妻来。是公来。胃に棚を釣って物を載せた様だと云う。小宮来。

(注：杉本は医師で副院長の杉本東造、是公は中村^{よしこと}是公、通称ぜこう。南満州鉄道株式会社の総裁であつた。予備門以来の友人で墓は同じ雑司ヶ谷霊園にある。)

その頃の俳句に

秋風やひびの入りたる胃の袋

がある。

寅彦は漱石死後に親友の小宮豊隆宛てに書いている。

今度の全集配本は始めから読んで居ます、やっぱり面白い。満洲旅行中あんなに胃が悪いのにあんなに無理をしているのが残念でたまらない、先生の寿命はあの旅行で半分以上縮められたような気がする、そして中村さんや橋本左吾氏^{うら}が怨めしくもなる、そしてなぜそんなしなくてもいい辛抱をしたかと先生が恨めしくなる。(大正7年8月31日付)

今の医者はみんな人間を十把一からげの物質として取り扱って居る、各個人の生活に立ち入

って治療を施すような医者はあるかないか疑はしい。耶蘇^{やそ}や釈迦を生きかえらせて医者にして見たくなった、せめて先生を医者にして僕等のからだを頼んでおき度かった。(大正9年1月10日付)

此の頃又少し胃が悪くなって検便の結果が弱陽性になったので少し心細くなった、先生が「継続中」といわれた意味が少しわかって来た。(大正9年3月21日付)

(注：「継続中」という言葉は、漱石が『硝子戸の中』30で、寅彦と推定される(十川信介『夏目漱石』、平成28年、岩波書店) T君から教えられたとしているが、5年程前なので記憶が曖昧になっているのかもしれない。)

先生の胃腸病院の日記を読んで居ると色々思い当る事があって非常に面白い、先生の心持がほんとうに分るような気がする処がある。「胃の中へ棚を釣ったようだ」という形容を見つけて嬉しかった、これから人に聞かれたら応用しよう。僕は「胃の中へすりこぎが横になって居るようだ」と云って居たがヤッパリ先生の方がいいようだ。(大正9年5月7日付)

また、寅彦日記では下記の記載がある。

昨日昼食後に少し胃が痛かったが、今朝2時頃から持続して痛んだ、4時頃しんを起して氷袋をつけたら痛みは止った。(略)終日冷やす、何だか胃が引き釣ったような暑いような心地である、鼠か何か胃の中でこっそりかじって居るような気もする。漱石全集11を出さして見ると先生が43年修善寺での最初の吐血は8月17日であつたらしい。年齢も丁度43であつた筈だ。(大正9年8月18日)

(注：しんは寅彦の妻。この時、寅彦も43歳であった。)

「破片(五)」では、食堂で昼食を食っている時にビール2杯を一気に飲み山盛りのチキンライスか何かをペロペロと食ってしまった四十男を見て次のように書いている。

何だか非常に羨^{うらや}ましい気がした。何が羨ましいか、そのときにはよくわからなかった。多分、呑んでも食っても膨^{ふく}れない「胃」が羨ましかったのではないと思われる。

食うものばかりではない、見るもの聞くものまでがことごとく腹にたまって不消化を起こす自分等のような胃の弱い人間には、この男のような屈託のない顔は一生勉強してもとても出来そうもない。(昭和9年11月)

寅彦の胃袋については、後に友人の辻二郎が次のように書いている。

「いつも胃袋を風呂敷包にして大切に持って歩く」程胃の悪い筈の先生がお客よりも盛に御菓子を食べられるのは非常に不思議に思えたし、大丈夫かしらと心配になった位であった。「(寺田先生を偲ぶ)、昭和11年3月、思想寺田寅彦追悼号)

寅彦の甘党は有名であるがこれも漱石譲りである。来客と同席の時は相手が手を出しやすいように自ら先に食べたようだ。

また、弟子の中谷宇吉郎も昭和7年10月に北海道大学の臨時講義で札幌へ来た時のことを次のように回想している。

まるで「胃袋を風呂敷につつんで」そっとささげるように大事にしながら、北海道までの大旅

行をされたのである。今から考えて見ると、随分無理なことを頼んだものであった。（「札幌に於ける寺田先生」、昭和 18 年 4 月）

寅彦としては師と同じ病気であることに意味を見出したかったようで、「病室の花」で次のように述べている。

今自分は先生の生命を奪い去った病と同じ病で入院している。幸いに今度はたいして危険もなくて済みそうである。同じ季節に同じ病気をして同じベコニアの花を枕もとに見るといのは偶然の事といえは偶然であるが、よく考えてみたらそこに何かの必然の因果があるのではないかという気がした。普通に偶然の暗合と見られる事でも、実はそうでない場合がかなりしばしばある。先生と弟子との間にある共通な点があれば、それは単に精神的のものでもこれが肉体の上に多少の影響を及ぼさないとはいわれない。あるいは逆に肉体に共通な点のあるのが原因でそれが精神に影響して二人の別々な人間の間には師弟の関係を生じる一つの因縁にならないとは限らぬ。もしそうだとすれば先生と弟子とが同じ病気にかかる確率（プロバビリティ）は、全く縁のない二人がそうなるより大きいかもしれない。（大正 9 年 5 月）

ベコニアは寅彦が漱石の見舞いに持って行った花でもある。漱石の死亡日は冒頭に書いたが、寅彦が亡くなったのは昭和 10 年 12 月 31 日であり、いずれも 12 月である。これも不思議な因縁でなからうか。師弟の間で病気までも感応している。ユングの言う「意味のある偶然の一致」、シンクロニシティーである。

その当時の胃の治療方法としては氷で冷やして痛みを取るか、蒟蒻で温めるしかなかったのだろうが、今から考えると驚くべき乱暴な方法でとても回復は望めない。

時期は少し遡るが明治 41 年 3 月、煤煙事件を起こした森田草平が連れ戻されて漱石宅で厄介になっていた頃、漱石と一緒に風呂に入った時の証言がある。

先生は湯槽の縁に腰掛けて、胃のあたりを手ぬぐいに湯を含ませては濡していられた。それが先生の湯に入ったときの癖である。しじゅう胃の腑のことが気にかかっているらしい。（略）私は不意に「先生！」と呼び掛けた。そして、先生が顔を上げられるのを待って、「先生は死んでから閻魔の庁へ行って、もう一遍この世へ生まれ返させてやると言われたら、はいはいと言って戻って来られるか、それともお断わりになりますか」と、いささか思い入ったように訊いてみた。すると先生は「そうだね」と言ったまま、なお胃の腑の辺をじゃぶじゃぶやっていたが、「ぼくはこの胃さえ直してくれたら、もう一遍生れてきてもいい。そうしてもう一度この一生を繰り返してみてもいいよ」と言われた。（『煤煙事件』の前後『夏目漱石（三）』講談社学術文庫）

筆者もやはり胃が弱いので特に調子の悪い時は二人の表現に共感できるものがある。胃を庇う何気ない動作も納得できるし、健康な胃になってもう一度人生をやり直したいという漱石の切実な気持ちはよく分る。

今では良い治療薬が出来ているので致命的になることは少ないであろうが、それでも胃の強い人は羨ましい。医者診察方法が不満で耶蘇や釈迦を医者にして診察してもらいたい、ということもいつの時代でも当てはまりそうである。

（注：漱石、寅彦、その他の引用文は一部かな使いを変更しています。）